

## 宮沢賢治「雨ニモマケズ」の教材としての本文決定の意義

### ―井伏鱒二『黒い雨』の「雨ニモマケズ」の引用に注目しつつ―

\* 田中成行

（二〇一六年九月三十日受付、二〇一七年一月十二日受理）

#### 第一章 消された「行ッテ」

国語科の教材は、児童生徒にできるだけ原文を伝えてゆきたい。表現するその一文字一文字に、作者の工夫や意志が籠められているからである。「二人の作者」としての自覚を持ち、自分が表現し伝えたいことをよりよく相手に伝えるために相手を思いやり工夫する実践を重ねてゆく時、推敲の末の原文が如何にかけがえないものかが実感できる。それゆえ、児童生徒にも学校生活の折々の中で、短歌や俳句、作文随筆等、韻文と散文を大いに活用して自ら創作する機会をつくり、「一人の作者」としての自覚と実践を日々の学び合いの中で実現してゆきたい。

教育的配慮として、やむなく原文が書き換えられる事があるが、推敲に推敲を重ねた末に結晶化した作者の一文字一文字への思いを思いやれば、作者との本気の対話を実感するためにも、まず授業者がその事実を理解した上で、子どもの実態に即して、できう

るかぎり原文を伝えてゆきたい。

その意味では、今回の平成二十八年度版・中学校二学年国語科教科書に掲載されている定番教材である太宰治作『走れメロス』の表現の中で、長年全教科書において省略されて消されていた最後の一行、

（古伝説と、シルレルの詩から。）

という、作者太宰治の宣言が、教育出版社の教科書において書き加えられた意義は大きいといえよう。「古い伝説と、ドイツの詩人シルレル（シラー）の詩を元にしたながらも、自分の伝えたい新たなメッセージをしっかりと書き加えましたよ」という作者太宰の強い意志が、この一文に籠められているからである。

それは、我々自身が「一人の作者」として、この言葉を書いた作者を思いやれば自ずと実感できるのではないだろうか。小説『黒い雨』風と言えば、「もし作者太宰治が生きかえって、自分で書きなおしたとすれば話はまた別であるが」となるうか。

実際、国語の授業において、最後の一行を抜かした形で、現在

の研究段階でその元とされる小栗孝則訳『新編シラー詩抄』(1)の中のシラーの詩「人質」を読む時、生徒達からは、「あつ、こればかりだ」や「盗作だ」という声上がる。しかしこの最後の一行が原作にはあることを伝え、作者太宰が書き加えた部分を比較し、読み込んでゆく時、生徒達の意見は変わってゆき、「自分が作者だったら、せつかく書いた最後の一行を削られるのはいやだ」という意見も出てくる。

同時に人は間違えるものでもある。ましてや手書きの文においては、誤字や書き間違いがありうるものであり、配慮が必要である。それゆえ、そのことを含めた柔軟で多様な読みを実践し、豊かな学び合いを生み出してゆきたい。

宮沢賢治が亡くなる約二年前の病床で「そういう者になりたい」と手帳に記した願いである「雨ニモマケズ」。その原文を複製本で見ると「ヒドリ」と伝えられているところが「ヒドリ」となっており、「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」の後には赤鉛筆で「行ッテ」と記されている。しかし、そのことを知らない人が岩手県には多いことに驚かされた。それは地元の岩手大学の学生も同様であった。

これは、校本の基準とされる筑摩書房の『新校本 宮澤賢治全集』(2)に、今挙げた「ヒドリ」が「誤記」であり、「行ッテ」が「戯書」つまり「たわむれに書いた文字。らくがき」であると書かれており、それに合わせて、活字化されるときに、「ヒドリ」を「ヒドリ」に、そして「行ッテ」は省いたかたちで伝えられているからであると思われる。

私は、学校教育の場において、原文が「ヒドリ」となっており、赤鉛筆で「行ッテ」と書き加えられていることを教えるべきであることを、ここで論じたい。

## 第二章 もう一つの「行ッテ」の意義

まず、新校本において「戯書」、つまり「戯れに書いた落書き」とされる、「雨ニモマケズ」の中に書かれた「行ッテ」で、ただ一箇所赤鉛筆によって記された「行ッテ」は、戯書ではないということを目指したい。

宮沢賢治の八歳年下の弟清六氏の孫である宮澤和樹氏は、その著書や講演の折々に「行ッテ」の大切さを伝えつづけておられる。今年、宮沢賢治生誕百二十年の宮沢賢治記念館特別展における「雨ニモマケズ」展のパンフレット(二頁)にも、祖父である清六氏の日頃語られた言葉と心を尊重し「雨ニモマケズ」の意義を次のように記す。

「…祖父が『雨ニモマケズ』は賢さんは作品として書いたのではないよ。あれは祈りだよ。」と言っていたのが心に焼きついていきます。(中略)祖父は私に「この作品は後半が大事なんだ」と教えてくれました。「東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ…」と東西南北に書かれたこの部分の「行ッテ」は特に大事だと言います。活字になると「行ッテ」は三ヶ所ですが原文だと四ヶ所書かれています。「北ニケンクワヤソシヨウガアレバツマラナイカラヤメロトイヒ」には「行ッテ」が入っていません。ところが原文の手帳を見ると「北ニ…」の前のページに赤鉛筆で「行ッテ」が書かれています。おそらく祖父は四ヶ所目に「行ッテ」を入れるのを前ページに書かれていたために躊躇したのではないかと思うのです。この事とは別にしても、「行ッテ」が何故大事なのかというと、賢治にとって「法華経」をこ

の世で実践することがなにより大事であり、知恵や知識があっても行動しなければ意味がないからです。行動こそ「行ッテ」なのだと思えます。：」

と、和樹氏は、賢治の作品の本文校訂に携わった祖父の清六氏が「雨ニモマケズ」の本文の校訂において、四つ目の「行ッテ」が前のページに書かれてあつたために入れるのを躊躇したのではないかと言ひ、行動を大切にしたい賢治を思いやり、暗に四つ目の「行ッテ」の「校本」の「戯書」説を否定していると思われる。筆者もその考えに同意する者であり、その根拠を「行ッテ」と同じ赤鉛筆を使った文章に注目して考察したい。

そこで、「雨ニモマケズ」の書かれた『雨ニモマケズ手帳』と呼ばれる、縦一三センチ横七、五センチの小さな手帳の、その複製本③を見ると、「行ッテ」と同じ赤鉛筆で書かれたと思われる文字が、二ページには次のように書かれている。

「：18 十一月十六日

就全癒：」

これは「雨ニモマケズ」が書かれたとされる十一月三日の後の十一月十六日に結核の病状が「就全癒」つまり「全治に向かう」と書く程に回復し十八日にその体調のよさの中で「雨ニモマケズ」を読み直して「行ッテ」を同じ赤鉛筆で書き加えたものと考えたい。

つまり、結核のため病床に伏していた賢治が、体調が回復して歩けるほどになった十六日以後に、「雨ニモマケズ」を読み直し、「東西南」に「行ッテ」と書いて自らその場に「行く」ことを願っていた時に、「北」に「行ッテ」がないことに気づき、「今なら行ける」という実感の元に、かつて石鳥谷などに肥料相談に自ら行って取り組んだように、

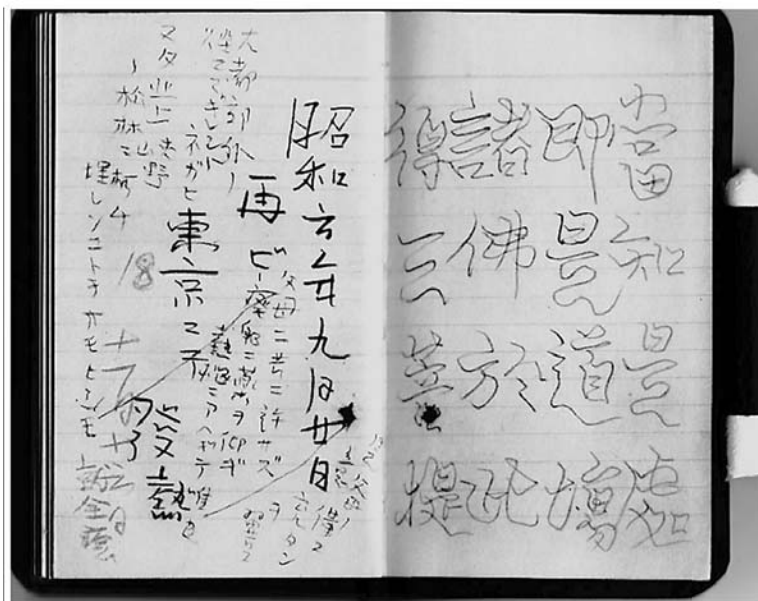


図1 『雨ニモマケズ手帳』  
一頁・二頁

二頁の左下に赤鉛筆で「18 十一月十六日 就全癒」と書かれている。

「北ニケンクワヤ

ソシヨウガ

アレバ

ツマラナイカラ

ヤメロトイヒ

」

の「アレバ」の後にも「行ッテ」を入れようと、空白のある前のページに赤鉛筆の大きな字で「行ッテ」と刻みつけた、と考えたい。つまり、「就全癒」という、「結核により病床に伏していて実際には行く事ができないと思っていた体」の体調の回復の実感によって、手帳の「十一月三日」の内容を読み直し、「そういう者に私はなりたい」という「願い」が、今なら「行ッテ」実践できるとはないかという、期待と喜びの思いを表した「行ッテ」であると考えるのである。

それ故、「北」においても、「喧嘩や訴訟があればその場に自ら訪ねて行かねばならない」という思いを抱いて読み直した時に、「北」に「行ッテ」が抜けている事に気づき、体調が回復しつつある今、赤鉛筆で余白がある前のページに「行ッテ」と丁寧に書き加えて、自ら「行ッテ」自ら行動する賢治自身のあるべき姿を完成させるために推敲した表現であると考えたい。

### 第三章 『黒い雨』の中の賢治

もう一つ、「雨ニモマケズ」の表記について意見が分かれるのが、「二日ニ玄米四合ト」の「四合」が「三合」に書き換えられたのが戦時中か戦後か、ということである。

そして、戦時中説の根拠として多く引用されるのが、昭和四〇年から四一年（一九六五〜六六）に発表された小説『黒い雨』

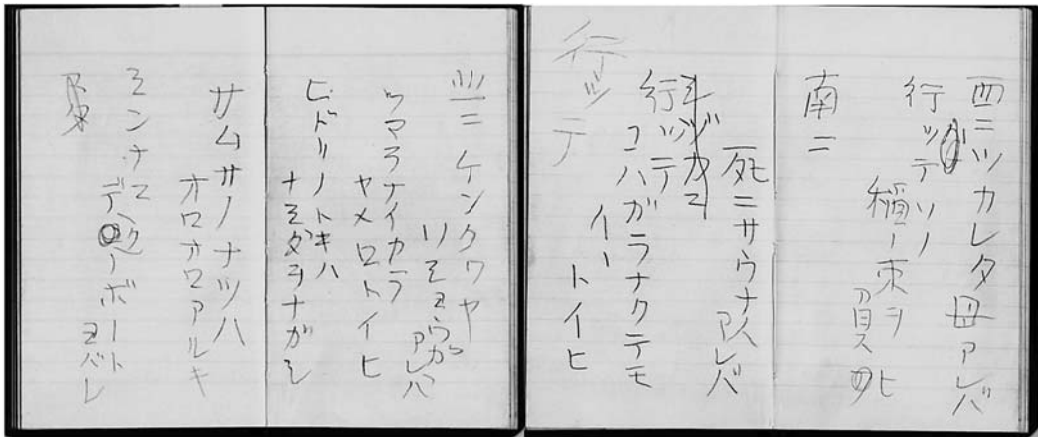


図2 『雨ニモマケズ手帳』

右 五五頁・五六頁 左 五七頁・五八頁

右の五六頁の左上に赤鉛筆によって大きく「行ッテ」と書かれている。

左の五七頁の五行目に鉛筆で「ヒドリ」。

の中の次の一節である。

「配給米が三合になったので、うちの子供の教科書のなかにある言葉が改悪されました」〈中略〉「一日ニ玄米四合ト……」となつていたので、米の配給量と睨み合わせて、「一日ニ玄米三合ト……」と改訂されてあつた」

という、広島が被爆する前の戦時下でのある奥さんの話の中に出てきた内容である。

昭和四一年（一九六六）井伏鱒二作『黒い雨』が新潮社から出版された。戦後二〇年たち、一九五〇年の朝鮮戦争、一九五四年のビキニ水爆実験とその被災事件等の後、一九六四年の中国初の核実験、一九六五年のインド・パキスタン紛争等を経て、ベトナム戦争の北爆の継続等の中でのことであつた。

小説『黒い雨』には元になった資料がいくつもあり、その中心となるのが重松静馬しげまつしずま氏の広島での被爆記である『重松日記』<sup>(4)</sup>である。

二〇〇一年に『重松日記』が筑摩書房より出版公表されるまでは、主要な部分は殆ど井伏によるという擁護説から、文章の殆どが『重松日記』によるという盗作説まで様々な憶測が飛び交つていた。そして今『重松日記』を直接読んで比較することにより、以前よりも冷静に判断することができるようになった。

そして読み終えた後に実感されるのは、盗作説が出るくらいに、大切な場面が少なからず『重松日記』にもとづいてはいるが、やはりこの作品はそれらの資料を活かしつつ再構成した、作者井伏鱒二の小説であり、当然のことながら井伏自身による表現の創作によって構成され成り立っている井伏鱒二の作品であるというのである。

『重松日記』に入っている、「重松静馬宛井伏鱒二書簡 17昭和

四十年四月二十六日（封書）には、

……『新潮』に連載中のものは、いづれ後から全面的に書きなほしてその原稿をお目にかけますから（たぶん十二月ごろ）それまでは決してお読みにならないやうに願ひます。モデルに途中で読まれるかと思ふと書く気がしなくなりますから。モデル対画家の場合を想像して頂けばこの気持を分つて頂けると思ひます……

とあり、『重松日記』の著者の重松静馬氏自身に井伏は直接「あなたは画家である私のモデルである」と伝えていることから、重松静馬氏は井伏の「小説」という絵画と同じ創作作品のあくまでも「モデル」なのである。

小説『黒い雨』は、主人公閑間重松しずまつしげまつが、同居する姪の矢須子が原爆病患者と噂され、その「流言蜚語」によって結婚に縁遠いことに対して、世話人に当時矢須子が爆心地におらず被爆していないことを証明するため、矢須子の日記と、その付録篇として自分の「被爆記」を紐解き、清書するところから始まる。

その矢須子の日記の中に、  
「……私はおじさんに云われて、自分が泥の跳ねのようなものを浴びているのを知った。白い半袖ブラウスも同じように汚れているところだけ布地が傷んでいた。鏡を見ると、防空頭巾で隠されていたところ以外は同じような色で斑点になっているのが分った。私は鏡のなかの自分の顔を見ながら、能島さんの誘導で闇船に乗りこんで、もうそのときには黒い雨の夕立<sup>ゆふだれ</sup>が来ていたことを思い出した。午前十時ごろではなかったかと思う。雷鳴を轟かせる黒雲が市街の方から押し寄せて、降って来るのは万年筆ぐらいな太さの棒のような雨であつた。真夏だということに、ぞくぞくするほど寒かつた。雨はすぐ止んだ。私は放心

状態になっていたらしい。・・・」  
とあり、矢須子が「黒い雨」の夕立を浴びたことが書かれている。清書を頼まれた妻のシゲ子がそのことに注目し、縁談相手が誤解することを心配して省略することをすすめ悩むというところで話はすんでゆく。

しかし、『重松日記』にある相馬正一の解説によると、この部分はモデルとした重松静馬氏の姪の方の体験とは違い、「井伏の思い違いか作り話である。安子は重松夫妻と一緒に逃避行したのであって、「黒い雨」を浴びたことは「重松日記」のどこにも書かれていない」とある。つまり作者井伏の創作であり、直接被災ではない二次被災の被害をよりわかりやすく伝えるために「黒い雨」の例を取り上げ、矢須子の体験として描いたフィクションなのである。

そしてそのような、小説の創作の中の「作者の工夫」のひとつが、「戦時中に『雨ニモマケズ』の中の『玄米四合』を『三合』に直した話」であると考えられるのである。

主人公の閑間は、自分の「被爆記」を、矢須子の結婚の世話人に見せて説得するための矢須子の日記の付録篇としようとした。同時に「小学校の図書館の資料室へ「わしのヒストリー」として寄付するつもりだった。

そして妻シゲ子に、「戦時下における閑間重松一家の、貧相この上もない食生活」を書かせてさらに「被爆日記」に付け加えようとした。

その妻シゲ子が書いた「広島にて戦時下に於ける食生活」と題した手記が次の文である。

「さて、主食の米麦の配給について申しますと、初めのころは一  
人あたり一日量三合一勺ぐらいたったと記憶いたします。間も

なく米麦の代りに大豆が相当多く配給されるようになりまして、次いで外米や因果な大豆のしぼり滓が配給されるようになり、次第に減量されて大豆のしぼり滓が一日量二合七八勺になつておりました。

最初の頃の配給米は玄米でございまして、瓶に入れて米搗棒で搗いて白米にしないと食べにくいので、ぶつぶつ不平を云いながら夜鍋仕事で瓶搗きしておりました。それで搗減りがして、三合一勺ぐらいの頃でも一人一日量二合五勺強ぐらいになりました。

たぶんその頃だつたと思います。隣組の宮地さんの奥さんがその筋に呼び出されてお叱りを受けたことがございました。宮地さんの奥さんは農家へ食料を買出しに行くとき、可部行の電車のなかで隣の人に「このごろ配給米が三合になつたので、うちの子供の教科書のなかにある言葉が改悪されました」と申されたそうでした。それは子供さんの教科書のなかにあつた詩の文句が「一日ニ玄米四合ト……」となつていたので、米の配給量と睨み合まして「一日ニ玄米三合ト……」と改訂されてあつたから、そう申されたのだそうでした。後で奥さんから聞いた話ですと、その詩は宮沢賢治という詩人の代表的な作品で、農民の耐乏生活をよく理解した修道的な美しさの光つている絶唱であつたということでした。「一日に四合というのを、三合と書きかえるのは、曲学阿世の徒のすることです。子供がこの事実を知つたら、どういうことになりますか。おそらく、学校で教わる日本歴史も信じなくなるでしょう。もし宮沢賢治が生きかえつて、自分で書きなおしたとすれば話はまた別ですが」と奥さんは仰有おっしゃっていました。しかし、かりそめにも国家の大方針のもとに編纂へんさんされた国定教科書に関する問題でござ

います。その筋の人は奥さんに向って、「流言蜚語」は固く慎め。お前が闇の買出しに行った事実がわかっておる。そんな人間が、教科書のごとに余計な容喙する資格はない。戦時下に於いて流言蜚語を放つ罪は、民法や刑法に抵触するばかりとは云われない」と云って、暗に国家総動員法に抵触すると云わんばかりであったそうでございます。もうそのころには、誰しも人前に出たときには言葉に気をつけるようになっておりました。」とあり、「雨ニモマケズ」の中の「一日ニ玄米四合」が、戦時中の配給米が三合に減らされたので子供の教科書まで「三合」と改悪されたことと電車の中で話して、その筋から咎められた宮地の奥さんのことが語られている。

つまり昭和十三年（一九三八）に制定された国家総動員法の元、戦時下に物も人も戦争遂行のために国家に捧げて総動員しろという考えに基づいて、物資不足となり配給米が三合に減らされた時には、そのことに不満を抱かないように「四合」の表現を「三合」に書き直してごまかしている、「曲学阿世の徒のすること」つまり、真実を変えて時勢や権力にこびへつらい迎合する者となっていると奥さんが批判したというのである。国家に不満を抱かぬために国定教科書が改悪された例として「雨ニモマケズ」の表現が改作されたこととして引用されているのである。

また「雨ニモマケズ」が、宮沢賢治という「詩人」の代表作で「農民の耐乏生活をよく理解した修道的な美しきの光っている絶唱」の「詩」として紹介されていることにも注目したい。現在詩か否か多様な意見があり、詩の本質を考える価値ある教材ともなるのである。

以上の内容を、小説『黒い雨』を通して知った世界中の読者は、「宮沢賢治とは詩人であり『雨ニモマケズ』はその代表的な『詩』

であり、戦時中に苦しい食料事情をごまかすために子供の教科書に載っていた「一日ニ玄米四合」の「四合」が「三合」に改悪され、国民の不满が出ぬような言論統制に利用されていたのだ」と思うだろう。

しかし、この『黒い雨』は作者井伏鱒二の小説、フィクションである。配給米が減らされ言論統制された戦時中の状態をよりわかりやすく表現して伝えるために、「雨ニモマケズ」が戦時中に改悪されたこととして活用されたのである。

文学作品をよりよく表現するための「作者の工夫」としての、実話と作り話、事実と虚構、ノンフィクションとフィクションの使い分けは大きな課題である。

わかりやすい口語表現を活かして多くの読者に共感されベストセラーとなった歌集『サラダ記念日』<sup>(5)</sup>の作者依万智氏は、その代表作、

「この味がいいねと君が言ったから七月六日はサラダ記念日」の興味深い成立事情を、『短歌をよむ』<sup>(6)</sup>等数々の随筆等の著書やテレビの対談等で明らかにしている。

それは事実として「君」から褒められたのは「サラダ」ではなく「カレー味の唐揚げ」であり、その日は「七月六日」ではなかったと言う。つまり二人の爽やかな恋愛のイメージ、恋のときめきを読者に伝えるためには、S音の響きを活かし、油っぽい「唐揚げ」より初夏のさわやかで野菜のおいしいときのものなので大げさなメインディッシュでない「サラダ」の方がふさわしいのであり、「七月六日」も「七月七日」だと牽牛と織女が年に一度逢える恋の歌に付きすぎるので、特別な日でなくて、七夕の恋のイメージを生かしつつその一日前の七夕イブで独自性を出すというような「作者の工夫」があると言うのである。それを「現実よりも真

実を」といい、それは作者の伝えたい「真実」を伝えるためには「現実」の事実をも作り替えて表現するのだと言う宣言であるともいえよう。

『源氏物語』「蛭」の巻(7)の中で、玉鬘に光源氏が語った「物語論」の中に、

「……日本紀などはただかたそぼぞかし、これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聴くにもあまることを、後の世にも言ひ伝えさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて言ひおきはじめたるなり。〈中略〉仏のいとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことありて、悟りなき者は、ここかしこ違ふ疑ひをおきつべくなん、方等経の中に多かれど、言ひもてゆけば、一つ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この、人のよきあしきばかりのこととは変りける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」

とあり、「事実を記す歴史は真実の一面しか表現できないが、物語は作り話であるが故にかえって、真実を自由に表現できる。名前もありのまま書かないから、いいことも悪いことも、この世に生きている人のありのままの姿を、見聞きするだけでは黙ってられないで、後世にどうしても伝えたいことの一つ一つを、心にとどめがたくて言葉にして言い残したものが物語だ。仏教の尊い真理を伝える經典の内容も、臨機応変に相手に応じて表現して伝えているから、人の善悪を越えた真理をまさに虚構のフィクションの中で方便として伝える物語は、尊い仏教の經典にも通じる」と語る、その物語論との共通点にも注目したい。

作者井伏が、「戦時中」の「食糧難」と「言論統制」の「真実」をよりよく読者に伝えるための「方便」として、「戦後」の「食糧難」の頃の教科書改訂の「現実」としての事実を作り替えて活用したこととなる。

では、モデルとされた重松静馬氏の『重松日記』に、戦時中に「四合」を「三合」に直した記録があるかとさがしてみると、見当たらない。

「重松静馬宛井伏鱒二書簡」を見てみると、「14 昭和四十年二月二日(封書、書留)」の、

：空襲当時、広島のお宅の近所の家の毎日の食生活を御教示願へないでせうか。つまりどんな拙いものを食べてゐたか、それが知り度いのです。お宅の献立もお知らせ願ひたいのです。どうして野菜を手に入れてゐたかといふことも知りたいのです。詳しいほど結構です。失礼ながらお願いいたします。：

や、「15 昭和四十年二月(消印十一日、葉書)」に、

：広島の食生活の件、いろく御教示にあづかり多謝仕ります。東京、甲州では米の配給は殆どありませんでしたが、広島でも一般の人はさうではなかつたのでせうか。当時の献立は誰かが書き残して置くべきだと思ひます。どうも御手数数をかけました。：

とあり、「16 昭和四十年二月(消印十七日、葉書)」にも、

：広島の食生活の件詳細に御知らせ下さいまして助かりました。さつそく利用させて頂きます。

御礼申し上げます。：

とあって、井伏は重松静馬氏からかなり詳しく広島戦時下での食料事情の情報提供を受けており、小説『黒い雨』の「広島にて



戦時下に於ける食料事情」に活用されていることがうかがえる。それゆえ盗作ではなく、むしろよく相談しながらの共作、あるいは合作といえよう。

しかし、戦時中「四合」を「三合」に直した文に関しては、『重松日記』の相馬正一による解説によると、

…井伏は昭和四十一年の『新潮』三月号掲載の「黒い雨」第十五章から被爆した軍医予備員〈岩竹さん〉を登場させ、第十七章から第十九章までは「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」を括弧つきで延々と引用している。井伏は折りに触れて、「重松さんの奥さんの日記はこしらえものだし、重松さんの日記も僕がこしらえ直している。しかし岩竹さんの是一字一句も変えていない。内容は妥当だし、いい文章だった」と語っているが、作中の括弧つき「手記」と原本とを照合してみるとかなり井伏の手が入っており、同じく括弧つきで引用されている岩竹夫人の回想録は井伏が岩竹夫妻の談話速記と「岩竹手記」とを組み合わせて作成した〈創作資料〉であることも判明した。…とあることから、井伏が創作した可能性が高い。

ちなみに、「延々と引用した」「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」は、「爆心地に近い場所で被爆しながらも奇跡的に助かった」例として『黒い雨』の閑間重松夫妻や姪の矢須子に希望を与える大切な記録として活用されている。

「現実」の事実を証言したものとしては、戦後、国定教科書としては最後のものを編集した小説『コタンの口笛』の作者石森延男氏の「「三合」の思い出」<sup>(8)</sup>がある。

その中で、戦後の日本の少年少女たちの心にひかりを与え、慰め、励まし、生活を見直すような教材を精選しようと中学生には

「雨ニモマケズ」を掲げたが、CIE（連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局）の係官に、子どもには難しいと認められなかった。しかし、それでも説得を重ねた結果、

「「二日二玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベトあるが、玄米一合減して、三合にするにはできないか。」

といわれたされた。詩の、文字修正は出来かねるといいはつたが、「それでは、いまの現状とは、あわないではないか。實感が伴わないことになる。贅澤な主食と子どもたちに思われはしないか。」と理攻めで反問してきた。當時は、一日に米の配給は、三合どころか、一合もない時代であった。そこで、わたしは賢治の弟さんの清六さんに會いに花巻までいった。そうしてこのことを相談すると、

「かまいませんよ、兄は、そんなことにこだわりません、笑つてみましょう。」

と、快よく認めてくれた。「字のために全文を削除されるよりは、少しの改めをしても、その精神を、子どもたちに味つてほしくて、中學一年の教科書に掲げた。それを見つけた、多くの詩人たちから、また評論家たちから、わたしは詩感がないといつてさんざん叩かれた。いやしめられた。けれども、いまでも、わたしは、「雨にも負けず」をかかげてよかつたと信じている。清六さんと賢治の詩碑のそばでうでた枝豆をたべた愉しさを忘れることはできないのである。」

と、戦後の食糧難の中のCIE係官との使命感に基づく折衝と、残すための「四合を三合に」の苦渋の決断、その後の誹謗中傷とそれに耐える支えともなった花巻での弟清六さんとの対話という秘めた一語の物語が率直に語られている。

「詩感がないといつてさんざん叩かれた」例としては、小倉豊文

氏の「…「四」を「三」と改変したのは失笑以上の何物でもなかった。主食配給一人一日二合五勺であったことを、既に当時を知らぬ人の多くなっている現在の為に書き添えておこう。…」<sup>9)</sup> 等戦後の食糧難当時の事情をふまえつつも厳しい批評はあった。

作家井上ひさし氏もよく言及した日本語の特徴である「文末決定性」の典型として、最後に「サウイフモノニワタシハナリタイ」とあり、それが賢治の切なる願望であることがわかるのである。消化が悪いが栄養のある玄米を四合もばりばり食べられる丈夫な体を持って元気にどこへでも出かけて行って、どんどん働きたいという。

玄米食は、脚気予防に有効なビタミン等の栄養物質が精白した白米よりも多く摂取できるということで、賢治が母校の盛岡高等農林（現岩手大学農学部）で学んだ鈴木梅太郎博士の抗脚気因子であるオリザニンの発見等にも関わり、身近な食べ方であった。

しかし、廣瀬正明氏の『宮沢賢治「玄米四合」のストイシズム』<sup>10)</sup>によると、実際賢治自身は陸軍の食事の脚気細菌説に立つ白米推進派である森鷗外への共感や、仏教の舍利信仰とも重ねて、玄米食を好んではおらず、また現状として自身の弱った体にも合わず、栄養があるからと奨める母への孝行とし一時期従ったようだという。

いずれにせよ、大切な文章を伝えてゆこうとするとき、一字直すか全文あきらめるか、自分が石森氏の立場ならどうするかを考えてみることも大切であろう。

そうして出来たのが、終戦後の昭和二二年（一九四七）に作られた新制中学校の第一学年用の国語の教科書「中等国語 一文部省」に掲載された「玄米三合」の「雨にもまけず」であった。

宮沢賢治の名が学校教育で使用される教科書に登場するのは、戦後、昭和二十一年の『初等科国語 四』に「どんぐりと山ねこ」が登載されて以降であるとされる。そのことをまとめた中地文氏は「教育面における「賢治像」の形成」<sup>11)</sup>で、賢治の名が教科書に登場するのは、戦後、昭和二十一年以降であるが、賢治没後二年後の昭和十年頃から教育に携わる人々に向けて、賢治あるいはその文学に関する情報が提供され始め、昭和十年四月発行の雑誌「児童」には童話「雪渡り」が詩人草野心平の推薦によって掲載されたという。昭和十五年には、映画「風の又三郎」が文部省推薦映画として全国各地の映画館や学校巡回映画として学校でも上映され、童話集『風の又三郎』が文部省推薦図書に選ばれりして、昭和十年代の末には、賢治は優れた児童文学作品の書き手として、子どもの教育や文化の発展を先導しようとする人々の間で注目され評価される存在となっていたとする。

しかし「雨ニモマケズ」は戦後に教科書に載ったので、花巻市の岩手県立総合教育センターの蔵書で戦時中使用された文部省による小学校の国定教科書『よみかた』(二〇四)と『初等科国語』(一〇八)を閲覧したが、やはり掲載されてはいなかった。

戦時中に「雨ニモマケズ」が掲載され広く読まれた例としては、小倉豊文氏が「ド」と「デ」―「雨ニモマケズ」と「雨ニモマケズ手帳」<sup>12)</sup>で紹介された、昭和一七年（一九四二）に大政翼賛會文化部編で戦時下国民統制の目的で作られたとされる『朗読詩集 常盤木』の一三篇の詩の中に掲載されていることが知られている。

その詩集の中で「四合」が「三合」に直されているという説もあったが、原文<sup>13)</sup>を確認したところ、「一日ニ玄米四合ト」と記されており、直されてはいなかった。

その中の一つである作品「旗」の解説に、  
「…尚、此の作品は青少年の集いや錬成の行事や慰樂會に、青少年全てが元氣よく朗讀出来るやうに工夫をして所謂群讀を行ふにも適して居る」(二四頁)

とあるように、「青少年向けに声に出して朗讀されること」を目的としたものでもあり、昭和一七年に五万部も印刷発行された刊人物である。そこに原文と同じ「四合」と記されていることは、戦時中には改訂されていないという一つの有力な資料ともなるといえよう。

そして「雨ニモマケズ」の前に置かれた作品は、「告別」の題の詩が二つ並び、先の口語自由詩で有名な萩原朔太郎の「告別」は、

「汽車は国境を越えゆかんとす」  
「駅路に見送る人々よ／悲しみの底に齒がみしつ／告別の傷みに破る勿れ」(三六頁)

と、普遍的別れをうたうが、次の詩の作者は解説に「今尚出征中の一詩人、九州の人」とある風木雲太郎で、その「告別」は、

「船が 岸壁を離れた時／兵隊は〈中略〉愛するものへの告別のせつなさは／やがておおいなる戦に征く歌となり／戦ふ意志に整列する銃口に旋回し／船は城のやうに崇高な表情で走る」  
(三八～三九頁)

と、戦時下の戦意高揚の詩である。解説では二つの詩を比べ「共に、崇高にして悲壮な「出発」と「告別」を歌つたものながら、一つは「汽車」と言ふ假象に依つて「激しき熱情を持つて出発せんと欲する」ものを歌つたに反し、一つは、皇國の為、別れ征かんとする者の心と姿とを直截に歌つてゐる。…」とあり、「國のために愛する者と別れ戦争に征く兵隊」を描く詩を引用し、その次に「雨ニモマケズ」が引用されるのである。その解説には、

「…手ずれ汚い、普通のポケット用手帳の中のいるいるな覚書などにまじつて、この詩が鉛筆で書きしるされてあつたのである。詩人はこの詩をまつたく人に見せる気はなく、純粹に自分の心構のためにひそかに書きしるした。この詩を読むと第一にさういふ、心を一途に内に傾けてゐる純粹さがわれわれを打つ。この平凡なやうな、へりくだつた、最低の願のやうに見える「サウイフモノニワタシハナリタイ」といふ聲をよくきいてみると、それが實に大きな願であることにわれわれは気づいてくる。この「私」を滅した、はからひや高ぶりの無い境地に人は容易に到り得ない。しかし斯ういふ人にして始めて萬人の眞の友たり得るのだといふことにわれわれはだんだん気づいてくる。この詩人は岩手縣の農民のためにその一生を捧げた。」  
(四二頁)

とある。戦時中の「雨ニモマケズ」の一つのイメージがここにとめられている。そして、この詩集の他の多くの詩のような戦争を直接表す表現は無いのだが「私」を滅した、はからひが前の詩の「國のために愛する者と別れ戦争に征く兵隊」の姿とその行動を受けた形で引用されているといえよう。

この「雨ニモマケズ」の後に、この詩集の最後のトリとなる作品「手記抄」がある。

「黙々と河端を七里も歩きました／今ケチ臭い理由なんか阿呆のやうに踏みにじつて愉快です／潰走する敵を追撃中だからです／倒されるか叩きこはすか／笑へないけれどもたのしいものです／あなたは正義についてどんな考へをもつてゐますか／暗い生活の中こそ強かつたあなたは／やがて君國のため戦死した私のむくろをみて／ハツキリ解ることせう／私は行きます〈中略〉」

塹壕をいくどか飛び越えた／泥濘のなかで手榴弾のさくれつをきいた鐵片のうなり聲／力を込めて折れよと突出す銃劍／呻きと喊聲のみだれ飛ぶ一瞬（中略）  
おれは未だいききてゐるぞ／くそつツ  
生きてゐるぞ

おれの耳に雨中にあがる凱歌が聴えてくる  
おれの眼にふるさとの山々がみえてくる  
おれの腕にあのひとが取りすがらう  
おれの肉體にはウチがわくだらう  
おれの死を悲しむ奴はどこのどいつだ

いま おれは君國のために死んでゆくのだ（四三〜四七頁。）  
と、「潰走する敵を追撃中」の「倒されるか叩きこわすか」「力を込めて折れよと突き出す銃劍」「呻きと喊声のみだれ飛ぶ」戦闘のさ中で、「正義」を問ひ、「おれの腕にあのひとが取りすがらう」と故郷の恋人を思いつつ「いま おれは君國のために死んでゆくのだ」といふ、一詩人の一人の兵士としての死を歌う詩で終わるのである。この詩は、作者田中清司の遺稿集『衣装せる風景』の摘録であり、解説に、

「かくて田中清司はこの詩にも見られる通り勇敢にたたかひ、遂に昭和十三年十月十六日に徳安に近き馬廻嶺に於て右胸部貫通銃創その他重傷を負ひ、同十一月二十六日南京〇〇病院に於て二十七年を一期として戦傷死を遂げたのである。（中略）その墓標は所澤の町はづれにたつてゐる。この秋は靖國のやしろに神とまつられることであらう。（昭和十六年七月事變四週年記念日、日本青年詩人聯盟記）」（四七頁。）  
とあり、この詩集の主旨が読み取れよう。

また他の十二作品の中の一つには、在米中に詩人として活躍し、賢治のあこがれた石川啄木が、あこがれて手紙を出した野口米次郎の詩「召集令」がある。そこには息子の正雄氏に召集令が下り、

「…私は聲を聞く、／「國のお召した、伴の體を捧げよ、伴の魂を捧げよ。」／私は外國に聖戦を説いた。／東亜の新建設を説いた。／どんな犠牲も辞しないと説いた。／最後の肋骨一つも、最後の血一滴もいらないと説いた。／人は私の言葉に文學を見た。（中略）私が國に伴を捧げなかつたならば、／私の言葉は、無責任の一札になつたかも知れない。（中略）私を文學の恥辱から救つて呉れた。（中略）伴よ、往け、往け、往け。」（二八〜二九頁。）

とあり、解説には、  
「…悲しいかな、人は彼の切切の言句に「文學」を見、単なる雄辯の連鎖を見た。否、少くとも詩人は思ふ。（中略）感謝する！往け、往け、我が子！汝の身も魂も祖国のために捧げつくせ！」（三〇頁。）

とあつて、詩人野口の詩を借りて、詩の言葉つまり「文學」だけでは「単なる雄弁の連鎖」にすぎないが、その詩人の息子が実際に兵士として身も魂も國のために捧げて戦場に「行く」ことによつて「単なる雄弁」ではなくなり責任は果たされるのだと、解説者ひいてはこの詩集の編纂者は言い、青少年に望むことを率直に披瀝している。

つまり、「四合」が「三合」に変えられていなくても、「私」を滅した「滅私奉公」を美德として、國のために戦いに行くことを青少年に勧める目的で「雨ニモマケズ」も引用されていることが読み取れよう。

しかし編纂者のそのような意図とは別に、読者によっては、「北ニケンクワヤ ソショウガアレバ／ツマラナイカラ ヤメロトイヒ」を読んで、「喧嘩や訴訟」の「争い」、そして究極の「喧嘩」「争い」である「戦争」にも、「ツマラナイカラヤメロトイヒ」と、「戦争があつたら、行つて、つまらないから止めると言う、そういう者に私は成りたい」という願いの詩だと、読む人もいたかもしれない。

兵士は戦場においてはどんな命令にも従わねばならないという「絶対服従」の戦争の非情さ、むごたらしさを賢治は知っていたはずだ。

〈生前発表初期断章〉にある「復活の前」<sup>〔4〕</sup>の中の、

「……戦が始まる、ここから三里の間は生物のかけを失くして進めとの命令が来た。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合せる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く叫び泣きながらかけ足をする。……」

は、賢治が、戦場では何が行われているのか、戦争では何が起きているのかを知っていたあかしの文である。

さて以上のように事実として戦時中の教科書の中に「雨ニモマケズ」の「四合」が「三合」に直された例を確認できなかった。

つまり、作者井伏鱒二が、フィクションとしての小説『黒い雨』の中で、戦時中の「食糧難」や「言論統制」や「流言蜚語」の「真実」をよりよく表現するために、「現実」の「戦後の教科書の宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の中の「四合」を「三合」に書き換えたこと」を、「作者の工夫」の一つとして「戦時下のこと」として活用した「方便」なのだといえよう。

もしそうであるならば、世界中の読者にも、事實は戦時中ではなく戦後に直されたことを伝える意義もあるだろう。

#### 第四章 同じ赤鉛筆の「不軽菩薩」

「行ッテ」を書いたものと同じ赤鉛筆で書かれたと思われる文が、校本の二二二頁から二二四頁にある。

「あるひは瓦石さてはまた

刀杖もつて追れども

見よその四衆（ゆなかけして）

仏性なべて 具はれる

―― 拝をなす

「不軽菩薩 \*一頁に大きく一語」

「菩薩四の衆を礼すれば

（あるは）ひは瓦布

衆はいかりて罵るや

この（比丘）無智の比丘いづちより

来りてわれを礼するや

「我にもあらず

（せし我）衆ならず

（せし衆も）

法界にこそ立ちまして

たゞ法界ぞ法界を

礼すと拝をなし給ふ

とある。この「不軽菩薩」は一般には「常不軽菩薩<sup>じょうふきやうぼさつ</sup>」とも呼ばれ、『法華経』巻第七の「常不軽菩薩品第二十一」に登場する。

小学館『日本国語大辞典』には、

「……常に身に不軽の行をなし、口に不軽の教を宣べ、人に逢うごとにいづれも仏になるべき人とみて、敬つて軽慢せず、うやうやしくこれを礼拝したという」とある。

※丸括弧内は、訂正・推敲部分の見消を表す。

鎌倉時代新仏教の日蓮が自分と重ね目指した菩薩として常不  
 軽菩薩は有名だが、それ以前の平安時代の『源氏物語』に成仏  
 のため描かれている意義を藤井貞和氏は『構造主義のかなたへ  
 ー』『源氏物語』追跡』<sup>(15)</sup>で指摘している。

『源氏物語』「総角」の巻には、「この常不軽、そのわたりの里里、  
 京まで歩きけるを」と、阿闍梨が夢で見た、迷える宇治の八の  
 宮の霊を成仏させるため念仏と共に行った、様々な所へ歩いて  
 行き道行く人を拜む行である「常不軽の行」として出てくる。

ではなぜ八の宮は成仏出来なかったのか。その理由を、橋本  
 治氏は『源氏供養』上巻<sup>(16)</sup>で、「彼は「傲慢の罪」によって、  
 今もどこかをさまよっている」とする。それゆえ阿闍梨が弟子  
 の僧に命じた「常不軽の行」とは、「人はすべて成仏の道へ至  
 る為の師となる存在だ」ということを唱えて、道行く人すべて  
 の前に跪いて額をつけて拜む行」であり、「如何に仏教に志し、  
 如何にそれに身を入れ、自身は世に容れられない「悲劇の親王」  
 であっても、この八の宮が親王である限り、絶対に道行く人の  
 前で跪くなどということはしない」という理由で、その「慢心」  
 に対して行われた行であると解釈している。

そもそも常不軽菩薩は、「私はあなたたちを敬う、けっして軽  
 しめない。みな菩薩道を行じて仏になる人たちである」(田中智  
 学『毒鼓論』(天業民報社、大正十一年(一九二二)より)と  
 呼びかけ、全ての人を仏に成る人として敬う菩薩であり、釈迦  
 の前世の姿でもあり、その言葉を「無智」で信じられずからか  
 いととって瓦石や刀杖で追い払う「比丘・比丘尼・優婆塞(沙弥)・  
 優婆夷(沙弥尼)」を「四衆」とする。その四衆達は、常不軽菩  
 薩が礼拝すると、怒りののしって「この「無智」の比丘(不軽菩薩)  
 は、いったいどこからやって来て私を礼拝するのだ」と言うが、

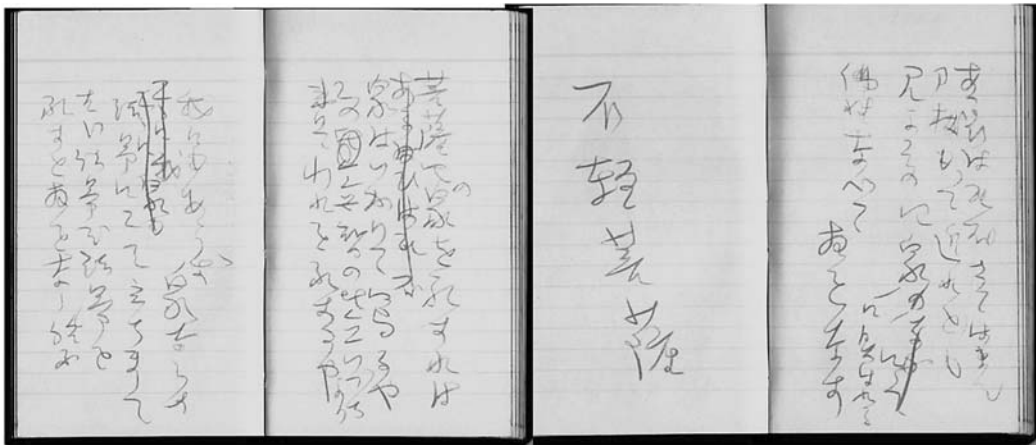


図3 『雨ニモマケズ手帳』  
 右一二一頁・一二二頁 左一二三頁・一二四頁  
 四頁全て赤鉛筆で書かれている。

そもそも「不輕菩薩も四衆も区別なく仏が仏を敬う真実の姿なのだ」と解せよう。

賢治が親友保阪嘉内宛手紙で「遠い先生」や「日蓮大菩薩」と敬う日蓮。

その日蓮はこの不輕菩薩と同じく一切衆生に仏性の内在を認めその仏性の開發を通じて人間主体的な世界変革を志向し、その不輕の礼拝行が衆生一人一人に内在する仏性を礼拝する修行ゆえ個としての人間を絶対に軽んじないという意志を秘めているのに対し、賢治の不輕理解は人間の根源的主体性を厳しく放棄したうえで民衆救済に走るが、個としての人間を絶対者の影とみる立場をとり、礼拝行における根源的な主体者や対象を「一乗の法界」とするのであり、幼い頃から家庭で信仰してきた浄土真宗の『歎異抄』にある還相的实践観に基づき個としての人間の意義を否定する考えが根づいていたからであろうと、松岡幹夫氏は『宮沢賢治と法華経』<sup>17</sup>の中でいう。『雨ニモマケズ手帳』の中の「不輕菩薩」を整えた次の文語詩<sup>18</sup>がある。

「不輕菩薩」

あらめの衣身にまとひ

城より城をへめぐりつ

上慢四衆の人ごとに

菩薩は礼をなしたまふ

（われは不輕ぞかれは慢

こは無明なりしかもあれ

いましも展く法性と

菩薩は礼をなし給ふ）

われ汝等を尊敬す

敢て輕賤なさざるは

汝等作仏せん故と

菩薩は礼をなし給ふ

（こゝにわれなくかれもなし

たゞ一乗の法界ぞ

法界をこそ拝すれと

菩薩は礼をなし給ふ）

松岡氏は「この詩にみられる個の意義の否定という問題」があると指摘し、この詩は「不輕菩薩の四衆礼拝の修行を詠んだものである。この詩の中ほどに「こゝにわれなくかれもなし たゞ一乗の法界ぞ 法界をこそ拝すれと 菩薩は礼をなし給ふ」との一節がでてくる。賢治は、不輕の礼拝行に関して、それを人間同士の礼拝としてではなく「一乗の法界」という絶対者の自己礼拝として理解していた」といい、「雨ニモマケズ」にも、「真宗的な他力救済志向や肯定的自己卑下の倫理観が感じとられる」という。

『雨ニモマケズ手帳』の「不輕菩薩」の、

「我にもあらず 衆ならず

法界にこそ立ちまして

たゞ法界ぞ法界を

礼すと拝をなし給ふ」

は、ほぼ同じ意味を表しているといえるが、その前の句で「あるひは瓦石・」と、「瓦石や刀杖を持って追い立てる四衆であっても、その一人一人に具わった仏性を全て礼拝する」と言うのだから、個の意義の否定にはならないのではないか。

賢治の蔵書「続帝國文庫」（博文館、明治三十六年（一九〇三）の『佛教各宗續高僧實傳』の中の十三世紀中頃の『西行物語』に描かれた「不輕菩薩」像は、東下りの遠江国天龍の渡りの渡

し船での事件で、客が多く武士に「下りよ」と言われた西行が鞭で打たれ血を頭から流しながらも「手を合わせ」合掌して下りた時、泣く供の入道に出家者の覚悟を述べた言葉で、

「佛の御心は、みな慈悲を先として、我らがごときの造悪不善の者をすくひ給ふ、さればあだをもてあだをはずれば、其恨みやまず」

と悪人正機や他力信仰を表明した後、

「又不輕菩薩は、うたる、つえをいたまず、

我深敬汝等、不敢輕慢、所以者可、

汝等皆行菩薩道

とて、なほ礼拝恭敬し給ひき、これみな利他をむねとし、

仏道修行の姿なり」

と、『源氏物語』の迷える八の宮の極楽往生のために念仏と不輕行が一緒に行われたように、不輕菩薩が「利他」の「慈悲」の心や様々な仏道修行の実践と重ねて表現されている。

能を大成した世阿弥が『法華経 観世音菩薩普門品の中の言葉「衆人愛敬」を引用し、あらゆる人に愛される芸を目指して、あらゆる宗派の人々や、様々な身分や立場の人々を思いやり、あらゆる人が感動できる芸を追究したように、観念、宗派を越えたところで、賢治も東西南北あらゆるところへ出かけて行って、一人一人を思いやり自分の出来る事を精一杯やろうとし、それを願ったのではないか。そしてそんな思いを、「就全癒」と体調の回復を実感できた「十一月十六日か十八日」に赤鉛筆で日付も刻みつけ、「十一月三日」の「雨ニモマケズ」を見直して「北」の「行ッテ」を書き加え、『法華経』で意味する「四衆」に限定せず、さらに柔軟に、「東西南北」「四方」の「民衆」と言う意味での「四衆」のところに外かけて行きたいと、この赤鉛筆で「不

輕菩薩」の詩の文句も、一気に刻みつけたのではなかったか。

賢治が亡くなる十日前の昭和八年（一九三三）九月十一日に教え子の柳原昌悦氏に宛てた手紙<sup>⑨</sup>の中に、

「……どうも今度は前とちがってラッセル音容易に除こらず、咳がはじまると仕事も何も手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られなかつたり、仲々もう全健康は得られさうもありません。けれども咳のないときはとにかく人並みに机に座って切れ切れながら七八時間は何かしてゐられるやうになりました。あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうもありませんがそれに代ることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります。しかも心持ばかり焦つてつまづいてばかりゐるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだに付いたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといつたやうな順序です。」とあり、亡くなる直前まで健康の喪失は自覚しつつも「現在の生活」の中で今できることを精一杯やろうと努力し続ける賢治の姿と共に、「同輩を嘲けり」等、今までの自身の「慢」、おこりたかぶる心を見つめ直している姿が読み取れる。

それは、『源氏物語』の八の宮のような恵まれた境遇や才能や、



俗聖ゆえの慢心があつたことを、自ら謙虚に見つめ直している姿である。そしてだからこそ、賢治もこの「常不軽菩薩」のように、その場に自らが「行って」、「どこからかやって来」て、東西南北の一人一人全ての人を礼拝したいとの思いを込めて、赤鉛筆で「行ツテ」と刻みつけたのではないか。

### 第五章 原文「ヒドリ」の読みの諸説

以前在職していた東京学芸大学附属小金井中学校で「雨ニモマケズ」を、国語便覧等で一般に活字化されているものと、手帳の原文のコピーを並べて比較して違いをさがさせた時、しばらく時間をとり見比べていても「ヒドリ」に気づく生徒は、四〇人のクラスで一人いるかいないかであった。そうして気づく生徒の特徴は、常識にとらわれずにものごとを見つめ、いつも自由でのびのびとした独自の発想を生み出す子であることが多かった。逆に他の子ども達にとっては、幼い頃から目にし耳にするのは「ヒデリ」であり、その思い込みが「ド」の一字の表記の違いを見過ごさせたといえよう。

原文が「ヒドリ」となっていることを多くの学生が初めて知ったと答えたのも、やはり同じ理由によるのであろう。むしろ、地元であるからこそ混乱しないように公に基準とされる校本の説を幼い頃から徹底して教えられたとも考えられよう。

しかし、言葉の力を学び合う国語教育の場において、原文が「ヒドリ」であるのを誤字として「ヒデリ」と直されており、同時に原文通り「ヒドリ」と読む説がいくつもあることも知っていて、その意味と理由をそれぞれ理解し合った上で自分の考えを持つことは大切な意義ある国語の実践であると思われる。

そこでまず「ヒドリ」の読み方と解釈の諸説の中で、原文のまま「ヒドリ」と読む主なものをあげると、

・「ヒドリ」：『日雇い仕事の方言』説。または南部藩の公用語で、『日用取』と書いて「ひどり」と読んだという説で「日手間取り」ともいい、「日雇い」の人夫またはその肉体労働等の苦汗作業。もとは粉を落とす人夫のことであり、食物である米を作るための、土地持ちや、百姓仕事の人手不足をおぎなう労役の意味。前者は照井謹二郎氏の『花巻市の南部では昭和の初期ころまで、小作人などが日雇い仕事でもらう金を「ヒドリ」あるいは「ヒデマドリ」と言い、農耕自炊生活や農民指導の経験の中で小作人の苦しい生活を実感し、日雇いに出なければ生活できない小作人の貧しい暮しを思い、悲しみながら詠んだ』（読売新聞、一九八九年、十月九日朝刊社会面）という主張による。

しかし地元でその用例が見つからないと批評されてきたが、照井氏の「ヒドリ」説を受けた和田文雄氏が『宮沢賢治のヒドリ―本当の百姓になる』（コールサク社、二〇〇八年）と『続・宮沢賢治のヒドリ―なぜ賢治は涙をながしたか』（コールサク社、二〇一五年）を書き、前著では「百姓が凶作のとき、日手間とりにゆく、賢治は石灰の販売のため病いをおして東京までかけていく、あい通ずるものがうまれてくる」とし、森嘉兵衛氏の『南部藩百姓一揆の研究』からの引用として「南部藩の『日用取』の指令」と書いた部分を紹介した。そこでその引用された森氏の論文を読むと、「新田開発の人夫の賃金が安いので他領に出稼ぎする者が増加したためそれを禁ずる指令により一揆となったこと」に言及した部分に該当したが、その見出しと「ヒドリ」の読みの表記が森氏の論文にはないことが確認できた。そのことは入沢康夫氏の『「ヒドリ」か「ヒデリ」か 宮沢賢治

『雨ニモマケズ』中の一語をめぐって（書肆山田、二〇一〇年）や、鈴木守氏の『涙ヲ流サナカタ』賢治の悔い（友愛書房、二〇一六年）等においても指摘されている。

そこで和田氏に電話でお聞きしたところ、今各地にある「ヒドリ」の用例をまとめており近く出版の予定であるとのことだった。凶作や飢饉による飢えの惨状や小作人等の日雇いをせねば生きられぬ悲しみに注目するこの説は、コールサック社の鈴木比佐雄氏が「百姓だけでは暮らしていけず「ヒドリ」に出かけていかねばならない大多数の百姓の存在の悲しみ」を明らかにし「今の現代人の低賃金や雇用不安を抱えている勤め人たちにも通ずる説得力を感じる」と『宮沢賢治のヒドリ』の葉解説文でまとめているように、普遍的課題を提示している。ある意味で「ヒドリ」という言葉があつたかなかつたかを越える意義があるといえよう。賢治の短歌に「われもまた日雇に行きて／桑つまん／稼がばあたま 癒えんとも知れず」がある。

・「ヒドリ」・・・「日取り」。人生の悲しみの日、最愛の妹トシと永訣したように、永訣によるヒドリとして「葬式の日取り」説。（石川栄助『雨ニモマケズ』の詩の原文）（『宝船』トリョーコム、一九九〇年）、一七五～一八〇頁。）他。

・「ヒドリ」・・・「二人（ひとり）」説。「二人」の意味の誤記。又は「ひとり」を方言で「ひとり」と訛った言い方。「・・・『ヒトリ』孤独のときは・・・」の意味。（小倉豊文『雨ニモマケズ』新考・補説）（『宮沢賢治』第7号、洋々社、一九八七年、一九七頁。）他。

他に「目の炎症」や「肥取り」説等がある。

一方、「ヒドリ」の「ド」を「デ」と書き間違えたのであるという誤記説をみると、

・「ヒデリ」・・・「日照り」の誤記説である。『新校本 宮澤賢

治全集』（筑摩書房、一九九七年）や、『宮沢賢治全集10』（ちくま文庫、一九九五年）には（備考）で「ヒドリはヒデリの誤記であろう」とする。根拠は、「ヒデリノトキハ ナミタヲナガシ」の後の「サムサノナツハ オロオロアルキ」と、「ヒデリ」（単なる日照りではなく「早魃」＝魃は早の悪神）と「寒さの夏」つまり「冷害」との対偶表現としてふさわしい。（原子朗「賢治の文体表現」）（『国文学』第三四卷第一四号、一九八九年二月号）、四四～四五頁。）との説。その説に対して、夏の冷害が最も恐ろしい東北や岩手県の実状に合う「ヒデリニケガチ（飢饉）なし」「日照りに不作なし」という諺を引く反論に対しては、賢治の作品の具体的な表現をあげて答える主張がある。（入沢康夫『ヒドリ』か「ヒデリ」か 宮沢賢治『雨ニモマケズ』中の一語をめぐって）（書肆山田、二〇一〇年）の説等。

入沢氏は『アスコブドリの伝記』の、

「・・・植ゑ付けの頃からさつぱり雨が降らなかつたために、水路は乾いてしまひ、沼にはひびが入つて、秋のとりいれはやつと冬ぢゆう食べるくらゐでした。来年こそと思つてゐました。が次の年もまた同じやうなひでりでした。それからも来年こそ来年こそと思ひながらブドリの主人は、だんだんこやしを入れることができなくなり、馬も売り、沼ばたけもだんだん売つてしまつたのです。」

ある秋の日、主人は、ブドリにつらさうに云いました。

「ブドリ、おれももとはイーハトーブの大百姓だつたし、ずいぶん稼いでも来たのだが、たびたびの寒さと早魃のために、いまでは沼ばたけも昔の三分一になつてしまつたし、・・・」

等を引用し、亡くなる一年前の、昭和七年（一九三二）に雑誌「児童文学」に発表された形が「・・・次の年もまた同じやうなひどり

でした。・・・と「ひどり」となっている例や、詩の「毘沙門天の宝庫」の原稿の「早魃」のルビを「ひでり」と書くようとして「ひど」まで書いてしまい「ど」を「で」に直した例等々を上げて、賢治が「ヒデリ」を「ヒドリ」と書き誤ることのあったこと等を説明し、  
「・・・校訂者としてはいろいろなことを勘案しながら、これは「ヒドリ」と書いてはあっても賢治の誤記なのだと判断して「ヒデリ」と校訂し、責任をもってここは直しましたということを『校本宮澤賢治全集』で世間に公表しているわけです。そして今もこの処置は変える必要はないと思っております。・・・」

と賢治の文の多くの用例を具体的に踏まえた上での校訂であることを宣言している。

以上のように、それぞれの説の一つ一つの背景や事情や思いを、一つ一つ思いやり大事に受け止めた上で、自分の考えを深め合ってゆく学び合いを大切にしてゆきたい。

## 第六章 まとめ

「ヒデリ」とした校本の校訂にも立ち合った賢治の弟の清六さんと、「ヒドリ」説の「日雇い」説を出した照井謹二郎氏とは、もともと幼なじみであり親しく交流をしていたが、新聞やマスコミ等による「ヒドリ」説「ヒデリ」説の論争によって、それぞれの説の代表のような立場とされ、それまでのような自然な交流がしづらくなっていたのがつらいと清六さんが折々話したと和樹氏は語る。

多様な読みを豊かな価値として認め合える国語教育の場を創ってゆくためには、小・中・高・大それぞれの学校の授業者、

教員自身がまず、「雨ニモマケズ」のこの原文と多様な読みを理解していることが大切である。その前提の元で年齢に応じた配慮が必要だ。

そして「ヒドリ説ヒデリ説」等と、お互いの説や考えを語り合い伝え合う時も、「常不軽菩薩」のごとく、自分と高め合ってくれるかけがえのない人の一人として、相手を敬い尊重し、その独自の意見を大切に認め合える学び合いの場を創ってゆきたい。

「雨ニモマケズ」を教材として伝える時、その前提として人が書く時には書き間違えの誤記は必ずあり得るものとしつつ、本文の表記を、まず書かれたままの原文通りに「ヒドリ」とし、赤鉛筆の「行ツテ」も戯書であるかないかにかかわらず書かれているままに赤鉛筆で「行ツテ」と記して味わい読み取り合っ てゆく中で、年齢に応じた多様で豊かな学び合いが生まれてゆくだろう。

賢治が生まれ育ち、その地方語方言を話し生活した故郷のこの岩手県から、「雨ニモマケズ」の原文と多様で豊かな解釈が発信されてゆくことの意義をここに確認したい。

## 註

- (1) 小栗孝則訳『新編シラー詩抄』、改造社、一九三七年、二〇三～二二三頁。
- (2) 『新校本 宮澤賢治全集』第十三巻 覚書・手帳（筑摩書房、一九九七年、一三七頁。）
- (3) 『宮沢賢治「手帳」復原版』（生活文化社、一九六七年、二頁。）・『復元版宮澤賢治手帳』（筑摩書房、一九八三年、二頁。）

田 中 成 行

- (4) 『重松日記』(筑摩書房、二〇〇一年)  
相馬正一氏の解説により、重松静馬氏の日記の「火焰の日」死線上の彷徨「被爆の記」「続・被爆の記」の三部と、岩竹博氏の手記「広島被爆軍医予備員の記録」と、「重松静馬宛井伏鱒二書簡」とから成る。
- (5) 俵万智『サラダ記念日』、河出書房新社、一九八七年、二二五頁。
- (6) 俵万智『短歌をよむ』、岩波新書、一九九三年、二八〇二九頁、二二八〇一三三頁。
- (7) 新編日本古典文学全集『源氏物語③』(小学館、一九九六年)、二二二〇二二三頁。
- (8) 石森延男「麥三合」の思い出『宮澤賢治全集』第一〇巻、月報第一号(筑摩書房、一九五八年七月、四〇六頁)。題の「麥三合」の思い出の「麥」は、文章全体が旧字で書かれていることや麦について言及されていないこと等から類推して、原稿の「玄米」の表記を、旧漢字の「麥」と読み間違えた「玄米三合」の誤記と考えられよう。
- (9) 小倉豊文『宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究』(筑摩書房、一九九六年、一四一頁。)
- (10) 廣瀬正明『宮沢賢治「玄米四合」のストイシズム』(朝文社、二〇一三年、一三四〇二一四頁。)
- (11) 中地文「教育面における「賢治像」の形成「修羅はよみがえった」(宮沢賢治没後七十年「修羅はよみがえった」刊行編集委員会編著、二〇〇七年、八九〇九九頁。)
- (12) 『宮沢賢治』第3号、(洋々社、一九八三年、三七〇四六頁。)
- (13) 国際日本文化センター蔵書拝読。  
奥書『詩歌翼賛第二輯改版 常盤樹』定價金拾銭 編纂者大政翼賛會文化部、昭和十七年十月五日修正再版發行(五萬部)、四〇頁。

- (14) 『宮沢賢治全集』8、「生前発表初期断章」の中の「復活の前」(ちくま文庫、一九八六年、二八四頁。)
  - (15) 藤井貞和「構造主義のかたへ」『源氏物語』追跡』(笠間書院、二〇一六年、一六八〇一七三頁。)
  - (16) 橋本治『源氏供養』上巻、中央公論社、一九九三年、三二八〇三三四頁。八の宮が妻北の方亡き後、娘大君中の君を大切に育てつつも、北の方由縁の女房との間に生まれた娘浮舟を母子共に絶縁した慢心にも言及している。
  - (17) 松岡幹夫『宮沢賢治と法華経』(論創社、二〇一五年、二二一〇二三八頁。)
  - (18) 『宮沢賢治全集』4、文語詩稿 五十篇・文語詩稿 一百篇・文語詩未定稿ほか(ちくま文庫、一九八六年、二九一〇二九二頁。)
  - (19) 『宮沢賢治全集』9、書簡(ちくま文庫、一九九五年、五九七〇五九九頁。)
- 賢治が亡くなる十日前に出した花巻農学校の教え子柳原昌悦(しようえつ)への手紙から。  
稗貫郡亀ヶ森小学校内 柳原昌悦宛 昭和八年(一九三三)九月十一日 花巻町 宮沢賢治より。

引用図出典

図1-3 復元の精度が高いと言われる『校本宮澤賢治全集 資料第五(復元版宮澤賢治手帳)』(筑摩書房、一九八三年)を参照しつつ、文字の判読しやすい、『宮沢賢治「手帳」復原版』(生活文化社、一九六七年)を引用した。

\* 岩手大学教育学部